

のでござる。ところがエリヤ、エリシャとい
うあの偉大な御言持みこともちちの故事ことじを引つ張り出
して、イスラエルは穢けがらわしい夷狄えびす以下だ
と言いだしたので、村人が腹を立てたのは
当然でござった。

29 一同の者は突つ立ち上がつて、イエシユーさま
を村から追い出し、そもナザレなる村は山の上なれ
ば、その山の崖縁がけつちにイエシユーさまをば引つ張り
行き、そこから突き落とさんとしたのでござった。
30 されど、

そこはやはり幼なじみの友同士。息子むすこの身
を案じて髪振り乱し、金切り声の母マリア
ムの必死の嘆願もあつたでござろうが、親
しき故の激情も、いざとなると萎なえたので
ござろう。

イエシユーさまはその者らの真中を擦り抜けて、

去つて行きなされた。

その後イエシユーさまが再び故里ふるさとに足を踏
み入れることはござらなんだ。

二〇・穢けがらわしい憑つき物を落とす

参照 マルコ 1 21 ~ 28

己が真意をわかつてくれるものとばかり思
いこんでいた故里の仲間に、思いも寄らず
嫌われて、傷心の

31 イエシユーさまは「氣を取り直し、」その後、ガ
リラヤのカファルナウムの町に下がつて行きなされ
た。休み日ともなれば「寄合よあひに出かけてゆき、」町
の人たちにさまざま教えていなさつたが、³² イエ
シユーさまの言葉には、誰も刃向かえないようなの
びのびとした力と勢いがあつたから、皆はその教え
に舌を巻いて感服していたものでござった。

33 その寄合よりあひに穢けがらわしい憑つき物に取り憑つかれていた男がござった。その男が大きな声で叫んで、

「³⁴ やい、ナザレのイエシュー、何なにしに來きやがった？ 俺等おらどば成敗せいばいしにが？ 俺等おらどはわがづてるんだ。うぬア神かみさまから寄越よこされた尊たっといお方がただ！」³⁵ ケ

35 イエシューさまはこれを叱しかりつけて、言いなざるには、

「黙だまれ！ この人ひとがら落おちろー！」³⁶ ケ

穢けがらわしい憑つき物はその男を皆の真中に投げ倒して、それきり落ちてしまつてござる。その人には少しも怪我ががござらなんだ。

36 皆は仰天ぎやうてんして、互いに顔を見合せて言つた。「全体ぜんていこの人のこの言葉ことば「の力ちから」は何なんなんだ？ 誰だれ

も刃向はむがわれねアような勢いざおいど力を以て下知げちしたつてア（命令めいれいしたら）、あの穢やばい憑つき物ものが落おちてしまつたよわ！」³⁷ 仙

37 これで、イエシューさまの評判評判がその辺り一帯に鳴り響ひびいたのでござった。

二一・シモンの姑しやうとめの熱病

参照 マタイ 8 14-15、マルコ 1 29-31

38 寄合から出たイエシューさまは、シモンの家へ入りなされた。ところがシモンの姑しやうとめがひどく熱を出す病に取り憑つかれていたのでござる。それで皆は「如何いかににが治なおしてけでくなくいつちや（治なおしてやつてくださーい！）」³⁹ 仙と、イエシューさまにお頼たのみ申した。

39 イエシューさまは、姑かたなの傍かたわらに立ち、その熱病の憑つき物を激しく叱りつけなされた。するとたちまち熱病の憑つき物が落ちて、どこかへ逃げて行つてしまつてござる。それで、姑はすぐ起き出して、「大喜びで」皆のお取り持ちを始めたのでござった。

二二・病人を大勢治なおす

参照 マタイ 8 16-17、マルコ 1 32-34

40 日暮れどきになつて、町の人たち皆が、さまざまの病に苦くるしんでいる人たちをイエシューさまの

悪い霊を持った男

(ルカ福音書四章三一—三七節)

それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下って、安息日ごとにお教えになった。人々は全能をもってお話しになるその御教えみおしに感嘆した。

私は言った。——そのふるさとで重んじられた預言者はいない、ということ、とうとうイエスが彼の育った村を去らなければならなかったことが、ここで私たちに解るんだね。イエスはカペナウムという他の村へ行き、そこでもユダヤ教会へ入って行くんだ。

フェリクスが言った。——イエスが彼らと同じように貧しく、その衣服ももしかするとそんなに清潔ではなかったかも知れなかったので、その村の人々は驚いたんだ。そしてイエスが説く教えは、そんな汚れた衣服を着た人からは出るはずもないほど、素晴らしいものだったんだ！ 先週の日曜日、僕たちは他のユダヤ教会で人々がどんなことを言ったかを読んだ。つまり、「あの男は労働者の、大工の息子だ。俺たちはあの男の父親をほんとによく知っているさ」というようなことだった。だがここでも、人々は彼が偉大な権威をもって話したことに感嘆している。意識をもった労働者だったんだ！

それから家長のようなトマス・バーニアが静かな声で言った。――イエスさまはこの時から、福音の説教を始めたように見えます。それにまた、イエスさまは初めから、ご自分が他の人全部を合わせたよりも多くの力や権威を持っておいでだったことを、人々にお示しになったようにも思えます。イエスさまは他の誰とも同じようでないでいらっしやるだとも、他の誰も持っていない権威がそなわっていらっしやるだ。権威をもって話をするのができるのは、金持や学問がある人間ばかりでねえです。ここで僕らは、貧しい人間が金持よりもっと大きな権威をもって話してらっしやるのを見ます。そのうえ、その男は金持に「反対することを話さっしやるだ。それで人々は驚いた。その人たちがあ、イエスさまが彼らに説いたすべてのことに感心しましただ。」

その会堂に悪魔と汚れた霊に取り付かれた男がいて、大声で叫んだ。「止める。ナザレのイエスよ。おまえは私たちから何を欲するのだ？ おまえは私たちを亡^{ほろ}ぼそうとして来た。私はおまえが誰かを知っている。おまえは神の聖なるものだ。」

オスカル 彼は恐らくイエスよりも多くの権力を欲したんだ。だからこの男はイエスを攻撃した。「止める、出て行け」と、この男はイエスに言ったんだ。

アダンシート ちょっと聞きたいんだけど、現在、イエスに止めろと要求したり、イエスを避けたと思う人々といったら、どんな人々なんだろう？ どんな人が、福音の知らせが説教されるのを

喜ばないんだろうか？ 教会が、貧しい人たちや搾取されている人々に喜ばしき知らせというのは、その人たちのためのものだ、と明らかにすると、自分に対してひどいことをするものだ、と誰が思うんだらうか？

フェリペ・ペーニア。トマス老人の息子。——うん、まさにイエスの反対派、搾取者たちだろうね。今でも神が貧乏人たちを通して語るとすれば、それを快く思わない者たちと言えば、搾取している人間たちだろう。そして彼らは言うだろう。「われわれは神の御言葉を欲しない」と。

私は言った。——事実、不正を働いているすべての人間には、イエスに介入されまいとする十分な理由がある。そして私たちがきょう、ソレンチナーメでいろいろ話したこの福音は、当時、イエスの御言葉が悪霊に対してそうであつたとまったく同じように、彼らの神経に障ることだろう。——悪魔がイエスを「神の聖なるもの」と呼んだのも、面白いことだ。それは救世主と同じことを意味しているんだから。悪魔はイエスが誰であるかを正確に知っていたんだ。だから悪魔はイエスを避けたかったんだね。

オスカールの兄弟フェリオ。——聖書をよく読み、神の知らせを正確に知っていても、利己主義から、これを受け入れようと思わないのと同じことなんだ。神の知らせは彼らを傷つけるからね。悪魔は、イエスが人々を解放したいと思っている救世主であることに気づいていたから、イエスを避けたいと思った。悪魔は自分が悪く、神の聖なるものは正しいのだから、イエスを攻撃しはしなかった。彼はどうすることもできなかったんだ。

イエスはこの男を叱って言った。「だまれ！ この人より出よ！」

テレシータ これこそ、圧迫を続けていこうという人間に言われなければならない言葉だわ。そうして、こういう人間を黙らせなければ。

ラウレアノ この悪霊は前もってイエスを知っていたから、イエスの命令で黙ったんじゃないだろうか？ 悪魔はイエスを神の聖なるものと、ということは救世主であり、解放者であることなんだけれど、そう呼んでいるんだから。悪魔は、すべての人に聞こえるほど大きな声で叫んだんだ。それは、誰かがこの僕たちの教会にやって来て、大声で「お前たち皆は共産主義者だな！」と叫ぶのと同じことなんだ。だからイエスは悪魔に「黙れ」と言ったんだ。

ホセ ちょうど、イエスは大いなる権威をもって語った、と言われたばかりだった。イエスはこの時には悪魔を一言で黙らせることによって、より大きな権威を示している。彼はまた、この男をも悪い霊から解放した。「黙れ、そしてこの男を去れ」とイエスは言ったんだ。

悪い霊はこの男を皆の真中に投げたおしたが、この男を少しも傷つけることなく、彼から出て行った。皆は恐怖に襲われ、たがいに語り合っていた。「これは何事なにことだろう？ この人が権威と

能力をもって汚れた霊に命じたら、霊は去った」。

オスカル　ひょっとすると彼らは悪の側に立っていて、今、イエスが彼らよりも、ということとは悪魔よりも力を持っていらっしやるので驚いたんだ。だから彼らは感嘆して考え始めた。彼らは内心言ったんだ。「この男は悪魔よりも力を持っている」。

エドアルド　彼らは、イエスが人間を解放できるのを見た。

マリア　だから彼らは言ったのよ。「これは何事だろうか？」って。彼らはイエスの言葉、解放についでイエスのすべての教えを聞いた。そして今度は、それが実際、行われるのを見たんだわ。

トマス　ここでだって、悪魔は儂らの周りをうろついていますだよ。そして、どんな時にも儂らを誘惑していますだ。ある種の人間を他の人間よりも多く誘惑しますだ。今日だって彼はある場所を、他の場所より多く、うろついていますだよ。

アレファンドロ　もちろん、ソレンチナーメではそんなことはまれだろうけど、マナグアでは多いだろう。

フェリクス　あそこには、悪から出たあらゆる種類の不正があるからね。

そして人々はイエスについて、その辺りの村のあらゆる所で話した。

ひとりの男が言った。——そして、政府当局はすでにイエスに関する情報を得ていた。すでに彼が説教を始めた最初のころからだ。一種のスパイだった悪魔は、政府当局者に、彼の叫び声で、イエスに注目させたんだ。

他の男。——スパイってのは、皆、悪い霊をもった人間なんだ。だが、その悪い霊は彼らに由来しているのではなく、解放されたこの男のように、その人間から出て行くこともできるんだ。政府当局者が俺たちの所に送りこみ、まったくマリオなんて名前でなかった、あのスパイのマリオにもこんなことがあったんだろう。俺たちが今持っているこの体制が、彼に悪い霊を吹き込んだんだが、彼だっ
ていつの日にか解放されることがあるだろう。

ペドロ この福音書が語っている悪い霊を持った人というのは、まことに折悪しく、教会に居た
てることが、その第二の意味なんじゃないだろうかね？

イエス様の母国・イスラエルは、ユダヤのエルサレムを首都としていました。首都圏ユダヤから遠く離れて、ガリラヤがありました。ユダヤの人々によって軍事占領され、植民地とされた場所です。イスラエルがローマ帝国の傘下に入った時、このガリラヤの多くの場所が、ローマ帝国軍に献上されました。イスラエルから西に向かうとすぐ、あのギリシア帝国の末裔である大パルティア帝国との国境地帯になるのです。ローマ帝国は、ガリラヤを自由に使えることを、とても喜びました。そうして首都圏ユダヤは、ローマ帝国の覚えめでたく、いよいよ発展して行ったのでした。

そんなガリラヤにあるローマ風の都市・カファルナウムに

(後記：実は、カファルナウムは小さな田舎町であつたと、ずいぶん後で知りましたが、もう、私の書いたこの物語は、たくさんの方の写本によって知られてしまいましたが、このままにしておきます。イエス様の活躍した場所ですから「近代都市の大いなるカファルナウム」としておいた方が、読む皆様にとっても、よろしいかと思つています)

イエス様は降(くだ)って行かれました。大昔、モーセが神様に命じられて、大帝国エジプトへ降って行ったのと、よく似ています。

そしてイエス様は、「休み」とされた土曜日に、カファルナウムの人々を教えたのです。人々はもう、びっくりしてしまいました(ど

うぞ、あの「羊飼いの驚きの様子」を、ここで思い出してください。というのも、イエス様の言葉には、どうにも納得せざるを得ないような重みと迫力があつたからです。イエス様は、やはり、公民館でお話になつていましたが、その公民館に、一人の気の毒な人がいました。「穢（けが）れたダイモニオン」と呼ばれた小物の悪霊に憑（つ）かれた人でした。この人は、大きな声をあげ、こんなふうに叫び始めました。「えあああ！ 関係ねえだろう！ お前なんか！ 俺と！ ええ！ ナザレのイエス！ 俺をぶっ壊しに来たんだ！ お前、神の聖者だろ！ 知ってるぞ、知ってるぞ！」するとイエス様は、吐りつけて言いました。「黙れ！ この人から、出て行け！」すると、悪霊はこの人を投げ飛ばして、人々の真ん中に叩きつけ、そしてこの人から出て行ったのでした。ただ、それなのに、正氣に戻ったこの人の身体には、傷一つありませんでした。人々の間には、ある種の恐怖が広がりました。そして互いに語り交わしたのです。「この言葉の力は、いったい……なんという重みと迫力だ。その力で、穢れた霊が出て行ってしまった……」そうして、イエス様の噂が、その辺り一帯に限なく広がって行ったのでした。